

一般社団法人

全国高等学校PTA連合会

一般社団法人全国高等学校PTA連合会

(連絡先) 〒101-0025 東京都千代田区神田佐久間町2-1 (奥田ビル) TEL03-5835-5711 FAX03-5835-5757
発行人 佐野元彦 URL <http://www.zenkoupren.org/> eメール info@zenkoupren.org

会報

No.79

見つめ、支える



東

日本大震災と東京電力福島第一原発事故から3年が過ぎた。しかし、1000年に一度といわれる大震災と東京電力福島第一原子力発電所の事故の影響はあまりに大きく、被災地の多くの高校生がいまだに自由な高校生活を強いられている。一方、時の流れとともに、震災の記憶が薄れがちになっていくとの指摘もある。

全国高P連は、震災の記憶と被災地の高校生の現状を伝え続けることを事業計画に盛り込んだ。第一弾として平成26年4月21、22の両日、相川順子会長、椎野正敬副会長、池口康夫常務理事が現状を視察するため福島県を訪ねた。

一行は、福島県出身の25年度理事・調査広報委員長の関根英樹氏と福島県高P連25年度会長の福島佳之氏、事務局長の青木崇郎氏とともに、福島県教育庁を表敬訪問した。さらに、原発事故で本来の双葉町と大熊町の校舎が使えず、同じ浜通りのいわき市にサテライト校を設けている双葉高校と双葉翔陽高校を訪ね、それぞれの高校の校長やPTA会長らと現状や課題などについて意見を交わした。

(5ページに続く)

今号の主な内容

- ★平成26年度定時総会報告 2頁
- ★会長就任挨拶 2頁
- ★講話「学生の社会的支援の在り方や奨学金をめぐる現状と課題」2～3頁
- ★各委員会報告・会長のつぶやき 4頁
- ★新・被災地ルポ 5頁



★地区大会報告

北海道地区・東北地区・関東地区・東京地区・北信越地区
東海地区・近畿地区・中四国地区・九州地区

★シリーズ視点 世界に羽ばたけ！輝く高校生！

★平成26年度役員・委員名簿

8～10頁

10～11頁

12頁



平成26年度 定時総会報告

て意思表示した。(左写真)



3号議案で、理事・監事が選出された。休憩の後、第4号議案で会長・副会長・専務理事常務理事の執行部が選任された。さらに各委員会の委員長・委員の選任、顧問・相談役の委嘱が行われた。以上で審議事項が終了し、報告事項に移った。報告は以下のとおり。

会の冒頭、相川順子会長の挨拶があり、来賓紹介のあと谷合氏より祝辞をいただいた。さらに日本学生支援機構の甲野正道理事による講話が行われた。ついで議長に椎野正敬副会長が選ばれ、議事に入った。

審議に先立ち、前年の第63回全国大会山口大会の決算報告が行われた。続いて1号議案「25年度事業報告」2号議案「25年度決算報告、監査報告」が審議され賛成多数で可決承認された。なお、今回から正規の表決方法が採用され、議案ごとに賛成者が青い表決札を掲げ

・新役員紹介並びに代表挨拶。佐野元彦新会長が所信表明した。

・26年度事業計画・収支予算。

第64回全国大会福井大会の準備状況。

・3年後の第67回全国大会の開催地静岡県への主管依頼。

また、東日本大震災義援金が福島県へ贈られた。

新会長挨拶

佐野元彦



先ほどの理事会で賛成多数で会長に選任いただきました秋田県連会長の佐野元彦と申します。

この度退任されました相川会長には3年間にわ

たって、公益法人改革に伴う一般社団法人格取得に向けてのご尽力をいただきました。そして財政基盤確立のため、会費の引上げでは苦渋の決断をして各県連等のご理解を得て決定していただきました。厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございます。

さて、私自身は県連会長として3年目になりましたが、理事としては今年初めてです。先ほどの理事会でも、役員、会長・

副会長・専務理事、各委員長の選任に関して様々な意見がありました。冒頭に相川会長が言われたように、議論を尽くすことが大事なことだろうと思っています。

よく、学校と家庭と地域社会が三位一体で行うのが教育の力だと言われますが、PTAはちょうどその3つの中心にあり、つがいになれる存在です。是非そのところを自覚しながら、活動をしていきたいと思っています。

もう一つ、東日本震災の被害からの復興というものはまだまだ道半ば

です。それを風化させないためにも、皆様にご理解をいただくような情報の発信に努め、その結果がどのような形で生かされているかお伝えすることが私自身の大きな使命だろうと思っています。

経験豊富な副会長の皆様、新しく選任された理事の方たちの意見・視点を取入れながら、全国連合会としての役目を十分に果たせるように頑張つて参りますので、1年間皆様方のご支援をよろしくお願い致します。

講話

「学生の社会的支援の在り方や奨学金をめぐる現状と課題」(要旨)

日本学生支援機構理事

甲野正道氏

本日は、高等学校の段階で奨学金について学生

そして保護者の方によく知っていただくことが、今後、この奨学金制度が上手く回って学生支援が円滑に進むためには非常に重要だということで機会をいただきました。あ

りがとうございます。

1 なぜ奨学金の話か

高等学校の段階で奨学金について学生そして保護者の方によく知っていただくことが、今後の奨学金制度が上手く回って学生支援が円滑に進むために大事なことだ

と思っています。

私どもの奨学金は大学入学後に申し込む他に、高校時代に「予約の採用」ということで高校3年の時に申し込んでおき、大学、専門学校に進んだ後に手続きをとって受給するという制度がありま

2 奨学金とは

す。これが現在3割に達しており、非常に拡大してきています。

奨学金は、親ではなくて学生・生徒本人が借りるもので、学校を卒業して社会人になって半年たつと本人が返すということになります。私どもの奨学金は返還が必要な奨学金です。この返還金は次の世代の学生に資金を回すという形で使っています。国の予算も限られてい

る中では、多くの方に奨学金を受けてもらうにはやむを得ないとも言えます。そして、この返還していただくということが重要な点です。



3 奨学金の種類は

奨学金には2種類あります。一つは無利子、もう一つが有利子です。有利子といえばローンと同じに思われるかもしれませんが、この利子は非常に安いものになっています。固定か変動か選ぶこともできませんが、固定の場合は年率0.89%、変動の場合は0.20%と、通常のローンに比べると非常に低い利率になっています。最近は無利子のものをどんどん増やして、有利子の部分の伸びを抑えるという形で進めています。

4 奨学金の支給基準

奨学金については高校での予約を希望する場合

の要件があります。

一つは学力で、無利子の場合は成績が平均3.5、有利子なら平均水準に達していること。もう一つは家計の経済基準で、例えば夫婦と子供2人の世帯なら、無利子の場合は概ね年収800万円程度が上限で、有利子なら1100万円位が上限です。

5 受給制限

奨学金は卒業まで無条件で受給できる訳ではありません。学部段階では4年間が限度ですから、留年したり卒業見込みが立たなくなったりした時点で受給することが出来なくなります。毎年、途中で受給できなくなる方は非常に多くいます。

6 延滞者への対応

収入が少ないために、返還が厳しいという人も多いと言われています。確かに少ない収入の中から毎月2万・3万返すとなると生活が大変だということとは分かりません。そこで、本当に生活が困窮している方のために様々な制度を用意しております。例えば、年収が300万円に達していない方には、1年間の返

還猶予という制度があります。1年間返還しなくていいけれど、その分だけ終了の時期が1年先に延びるという形で最長10年間まで延長することが可能です。その期間中に何とか新しい職を見つけるとかして収入を回復していただきたいという趣旨です。また月々の返還額を減額する制度もあります。その分、やはり終了時期が先に延びる訳です。生活保護を受けるような状況でもこの返還猶予の制度を利用していただけます。

7 補足

最近、私どもの奨学金に対して、「高額の利息を取っている」とか「取立てが厳しい」とか「貧困者相手のビジネスになっているのではないのか」と指摘される場合があります。しかし全くの誤解、曲解だと思えます。金利については先ほど申し上げた通りです。

また、「滞納者はブラックリストに載せるのではないか」という声もあります。確かに3ヵ月以上延滞が続いてしまった方は、これを個人信用情報は、これを個人信用情報

登録機関に登録しています。これは、返還に苦しんでおられる方の多くが多重債務者になっていることから、そのような苦しみを防ぐためにもリストに載せる訳です。しかし、延滞が解消されたら「延滞は解消されました」と登録され、その後延滞等がない限りは、5ヵ月たてばそのリストから外れます。

さらに「返還できないとすぐに法的措置を取る」とか「回収業者がやってくる」ということも言われます。しかし、法的措置は延滞になって9ヵ月たった段階で、それも毎月定期的に連絡を取った上で「このままでは法的措置を取るようになります」という予告をした上で、それでもなお対応がない場合に初めて行うわけです。

本日は皆様のご理解をいただきまして、高校の段階からも優秀な生徒で本当に必要な方にはこの奨学金に申し込んでいただいて、大学や専門学校での勉強の機会をしっかりと確保していただければと思っています。

高校生新聞®



高校生スポーツ®



高校生の生きる力と知恵を育む新聞です

勉強、部活、行事と忙しい学校生活。進路や友人関係など悩みもあることでしょう。高校生新聞・高校生スポーツはそんな高校生を応援する新聞です。毎号読めば、やる気アップ、毎日が充実するこ間違いなし！高校生はもちろん、先生方、保護者、中学生も必読です。

▼ ホームページでも高校生のニュースを発信！

高校生新聞

検索



SP 読者学校パートナーズ
高校生新聞社
www.koukouseishinbun.jp/

編集部 TEL.042-725-1155
FAX.042-724-2710
henshu@scipa.jp

本社：〒194-0022 東京都町田市森野1-34-10
西日本支社：〒552-0013 大阪府大阪市港区福崎3-1-148
北海道支社：〒060-0004 北海道札幌市中央区北四条西5-1

●1993年10月創刊 ●全国3,896校の生徒が愛読(2014年4月号)
●タブロイド判/オールカラー/平均24ページ ●毎月10日発行

各委員会報告

健全育成委員会

委員長 井上 秀子

①『全国高校生の生活・意識調査』について、昨年引き続き協力者を加えた拡大委員会での協議を踏まえて実施する。

②『薬物乱用防止パンフレット』の作成について、今年度もより充実した内容に向けて検討していく。

ちなみに*「脱法ハーブ」は一度の使用で致命的な症状が見られるなど、大変恐ろしい薬物。ますます低年齢化・深刻化してきている薬物乱用の予防・啓発を推進する。

③自転車事故を始めとする交通事故防止のために、「バイクの3ない運動」を含めた「マナーアップ運動」を継続して行う。

また、安心協の行うI L A Sテストに協力する。

以上、限られた時間の中で、いろいろな観点から意見交換しました。様々な調査の結果を有効な資料となるよう当委員会全員で今年度事業に取り組みます。

*「脱法ドラッグ」は7月下旬から「危険ドラッグ」という名称に変更されました。

進路対策委員会

委員長 三輪 一朝

①第64回全国大会福井大会の研究発表企画について、講演と座談会の二部構成とし、座談会コーディネータは小林浩氏、パネリストは高校生2名、保護者2名、進路指導担当教員1名と決定した。

②同じく福井大会の研究発表の運営業務について今後詰めていく必要がある。また、今回の研究発表(平成27年度千葉大会)に向けて福井大会の成果を生かすために、現委員で福井大会参加者は事後に反省アンケートを提出する。また、今年の9月の委員会に講師の小林氏をお招きし、評価と総括を行う。

③平成25年度事業報告について実施事業の評価、反省、申送り等の確認をした。

④平成26年度事業計画について確認した。特に「緊急雇用創出基金事業」の拡

調査広報委員会

委員長 椎野 正敬

第1回調査広報委員会では、昨年度までの引き続き事項を委員全員に報告し今年度の課題を見出し、いく議論を行いました。

①現在の広報誌の各校5部の配布の現状を発行部数数・ページ数等の検討が必要である。

②HPの閲覧件数を増やす為に、各県連HPとのリンクだけでなく、保護者が関心を持つている各单位PTAのHPとのリンクが望ましい。

③全国大会での各地区の広報展示を委員が現地で確認し、次回委員会で見えを持ち寄り検討を継続する。

④今年度、初の取り組みで全国大会の参加者にアンケートを実施する。広報だけではなく、調査にも他委員会と連携を持ち次年度に繋がってゆく活動を進める。

震災復興支援等も含め、調査広報に取り組みますのでご協力お願いいたします。

研修委員会

委員長 金井 修

今年度は、佐野会長の「子供たちの為に」を一番の基本として運営して行きたいと思っています。そのために行う本年度の事業は、以下の通りです。

①全国大会への支援と協力(平成26年度福井大会に向けて問題点の最終調整、平成27年度岩手大会支援のための研究協議)

②全国大会開催ガイドラインの改訂：全国大会開催ガイドラインについて現状に照らして確認及び検証・検討する。

③調査研究のまとめ：平成26年度福井大会の各会場レポートを作成し、まとめ、平成27年度岩手大会に活かす。

④全国大会のWEB申込みシステムを全国高P連主体の運用にする。：山口大会から使用しているWEB申込みシステムを全国高P連の所有にし岩手大会以降は全国高P連として運用させる。

以上により、今後行われる全国大会をより充実したものにして行ければと思っております。

賠償責任補償制度運営委員会

委員長 坂井 正人

7月29日に第1回委員会を開催し、以下の2点について意見交換しました。

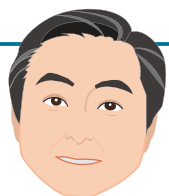
①事故防止媒体について事務局より、今年度新たに事故防止啓発のDVDを制作するに当たって、AR (Augmented Reality) 拡張現実)を導入したいとの提案がありました。スマホから簡単に動画再生できる情報媒体です。当日は委員会メンバー全員でARを視聴しましたが、不明なことも多く今後の検討課題となりました。

②賠償責任補償制度の現状について保険会社から説明いただきました。

当制度は近年自転車事故の件数増加や高額賠償が発生しており、当保険制度の見直し課題です。安価な掛金の全国高P連の補償制度の維持発展のためにも、委員会内で多面的継続的に検討を重ねてまいります。

佐野元彦会長の

つぶやき



●東京地区大会の基調講演は、バンクーバー・パラリンピックで銀メダルを獲得したアイスレスジホッケ日本代表の安中幹雄さん。高3の時に骨肉腫で右足を切断した時の叔母さんのお見舞いの言葉は、「右足の切断だけですんで、命が助かって良かったね」。この「絶対的積極思考」には、目から鱗。●そういえば、タレントの明石家さんまさんは、「生きてるだけで丸儲け」が口癖。歌舞伎俳優の故坂東三津五郎さんは、毎晩寝床で「今日もいい一日でした」と言ってから就寝したという。生きていること、生かされていることに感謝する習慣を身につけるようにしよう。●京セラやKDDIの創業者でJALの再生を担った稲盛和夫さん。82年の人生を振り返り、キーワードは「勤勉」「感謝」「謙虚」の3つだったとおっしゃる。想えば、幼い頃から繰り返し論されてきた基本的なこと。分かれ目は、それを実践するか否か。

新被災地ルポ

(1ページから続く)

「教育庁を表敬訪問」

福島市の県庁にある福島県教育庁では、菅野誠教育次長、秋山和則社会教育課主幹、須田元大社会教育主任らと懇談した。

菅野次長は福島県の高校の現状について説明。——海岸沿いの浜通り地区の8校が今年度もサテライト校となっている。サテライト校とは本来の校舎が原発事故で立ち入り禁止のため使えず、福



島県内の他の地域で他校の施設を間借りしたり、仮設校舎を設けたりしている高校を指す。その中でも原発から近い双葉高校や双葉翔陽高校など5校は、今年度で生徒募集を停止することが決定し、今年度入学生以降は後輩が入学しない。被災地の生徒のために、放射線量などの問題のない浜通りに新たな中・高一貫校を設ける予定になっているなど説明した。

これに対し、相川氏は、「全国高P連が被災地のために募金活動を続け、これまでに一億円を超す義援金を被災三県などに贈った。特に福島県を応援したいという全国の会員の思いは強く、昨年度の義援金は全て福島県高P連に託したい。会報で被災地の高校について情報を発信している。」と伝えた。その上で、「福島島の現状を決して忘れることなく、支援を続ける。」と約束した。

「双葉、双葉翔陽のサテライト校で意見交換」

——支援活動継続へ決意——

福島県教育庁への表敬訪問を終えた一行は、いわき市の明星大学内にサテライト校を設けている双葉高校と双葉翔陽高校



▶双葉翔陽高校の現状について説明する菅野校長



◀双葉高校の小島校長らと意見を交わす相川氏

を訪ねた。福島市にある県庁からは約120キロ離れている。

双葉高校は東京電力福島第一原発から直線で約3キロの距離にあった。大正12年に旧制双葉中学として開校し、甲子園出場4回を誇る浜通りの伝統校だった。しかし、原発事故以後は、明星大学の実験棟を間借りして学校活動を続けている。生徒は激減し、現在は1年生14人、2年生15人、3年生16人の計45人しかいない。このうち8人は今も親元を離れ宿泊施設で生活している。その上、今年度で募集停止が決まり、現在の1年生が卒業する3年後には休校となる。多くの卒業生が存続を願って活動したがかなわなかった。

一方、双葉翔陽高校は

福島第一原発の中心施設が立地している大熊町にあった。前身は双葉農業高校で平成9年に総合学科に転換し校名も変わった。地元の多くの農業従事者などが卒業している伝統ある高校だが、双葉高校と同様、今春がサテライト校最後の入学生となり在校生は1年生16人、2年生16人、3年生17人の計49人となっている。

双葉高校では小島稔校長、福島県高P連副会長の塩沢秀介氏らが出迎えた。小島校長が、高校の現状と、困難な中でも夢を持って必死に高校生活を送る生徒の素晴らしさを伝えた。

同じ施設内にある双葉翔陽高は菅野俊彦校長、青田文彦元PTA会長らが出迎えた。菅野校長が、教育方針などについて説明し、青田元会長が、宿泊施設など劣悪な環境の中で生徒が苦労してきた状況などを指摘し、全国の応援を訴えた。

二人の校長らの案内で一行は校舎内を見学した。もともとが実験棟のため、手狭な教室や、緊急的に作られたトイレ、

▼渡り廊下など校内を見学する一行 ▼仮設トイレ（手洗い場）



高すぎる屋根の渡り廊下などを見学し、あらためて生徒らの苦労に思いをはせた。

相川氏は今回の視察結果を理事会で報告した。全国高P連としては、平成26年度も引き続き、調査広報委員会を中心に被災地視察などを続ける。震災の被害を風化させず、教訓を未来へつなげるため支援活動を継続していく。

(なお、富岡高校関係者との調整がつかず、同校訪問は後日改めて行う予定。)

北海道地区 後志大会

価値観の多様化時代、子供たちの主体性を育む意欲的なPTA活動を



長、そして池本章・笹谷純代両監事には、会場から惜しめない拍手が送られました。



第64回北海道高等学校PTA連合会大会後志大会は6月14日（土）・15日（日）の両日、運河の街小樽を会場に、道高P連13支部の237校1206名が出席し開催されました。

初日午前中の総会では各案件の承認と役員改選が行われ、「山本富造会長」と4人の新役員を含む8名の役員が選出されたと共に、退任者紹介があり、平成23年度全国高P連北海道大会委員長で元道高P連会長の榊原綾子顧問と山本伸弘副会

午後の開会式では、山本富造新会長が「私たち道高P連が今まで担ってきた役割は、子どもたちの成長や学校支援に欠かすことができない重要なものであり、継続性の高い社会的責務を果たし続けてきたことへの自負がある。今後とも、会員の皆様の幅広いご意見に耳を傾け、子どもたちの応援団として、各支部や単位PTAの応援団として活力ある組織運営を進める所存です」と決意を

表明し、開催支部の佐藤公寿実行委員長が歓迎の言葉を述べました。また、共催者である全国高P連会長相川順子様のご挨拶をいただきました。



続いて、世界にニセコの素晴らしさを発信しているオーストラリア出身のロス・フィンンドレーさんが「僕のニセコ。冒険。恋愛。外国人」と題して講演されました。

東京演劇集団「風」による公演「ヘレン・ケラー」ひびき合うものたち」の演出、浅野佳成氏は語る。「ヘレンとアニーを結びつけたのは、飽くなき人間への好奇心と愛情の交感であり、教育の原点ともいえる姿である。」「人と人が出会うためにはさまざまな障がいがある。その障がいを抱えながら、人と人とはつながっていく。私たちはこの時代にあってこそ、教育について、人間について、より語り合いたい。」と。ラストシーンは決まった。大館大会のテーマと見事に重なる。あとはテーマに向かう内容の設定である。

第4会場は、秋田県高P連歴代会長からの発信。職種も異なる4名の生き方をベースに、次世代への提言。佐野会長がコーディネーター。親として今、何をなすべきかを問いかけた。

第1～3の発表会場は各県代表の発表。各会場

東北地区 大館大会

生きるこころを 子どもと共に 見つめて

2県とし、会場との協議時間を充分に確保できた。さらに、大館地区で独自の先進的な活動を続けるアドバイザー3名を配置し、それぞれの活動内容を発表する時間も設定した。どう考え、どう具体化していくのか、参加者にどんな想いが残ったのだろうか。

第63回東北地区高校PTA連合会大館大会、7月4日・5日、大館市民文化会館を中心に開催。ポップスデュオ「ダックス・スモーン」、歓迎演奏会が思い浮かぶ。

（文責 秋田県高P連事務局長 三浦基）



舞台に緞帳はない。ヘレン・ケラーのセットのままで始まり、すべて

関東地区 群馬大会

育てよう 若人のたくましく生きる力を 若人のためにPTAの連携の風を起そう

第60回関東地区高P連大会群馬大会は、関東6県及び山梨県から約2800名の参加を得て、7月4日(金)は全体会が前橋市のぐんまアリーナで、5日(土)は各分科会が伊香保温泉の5つのホテルにおいて盛大に開催されました。

大会前日の3日(木)は、関東地区高P連総会を開催し、各議案が承認された後、茨城県高P連の菅野宏氏が新たな地区会長に就任されました。



大会初日の4日は、開会式に先立って歓迎アトラクションが行われ、県立高崎高校の和太鼓「漢

組」の勇壮な演奏に続き、新島学園高等学校聖歌隊44名による「ハンドベル」が披露されました。両校とも県内外で広く活躍しており、多くの人がその演奏に魅了されたのではないかと思います。

開会式では、丸茂洋一実行委員長と全国高P連金井修副会長の挨拶に続き、関東地区高P連活動で功労のあつた個人・団体に表彰状と感謝状が贈呈されました。その後、吉川群馬県副知事の祝辞をはじめとして5名のご来賓から祝辞をいただきました。

続いて5つの提言を盛り込んだ大会宣言文が採択され、開会式を閉会しました。

記念講演では、声楽家の安田祥子氏を講師に迎え、「残したい 伝えたい 日本の歌」と題して講演いただきました。懐かしい童謡やきれいな日本語の語感などをお話しいただきながら、約30曲の歌を聴くことができました。

した。最後に、安田さんの手話に続きながら、「大きな歌」を皆さんで合唱して終わりました。とても充実した、90分でした。



大会2日目は、伊香保温泉の「ホテル天坊、ホテル木暮、福一、ホテルきむら」の4会場においては、各県の代表による発表や、活発な質疑応答などが行われ、特別設分科会の「ひびき野」では、「スマホ時代のリスクとスキル」について、兵庫県立大の竹内和雄先生の基調講演や3人のパネラーの有意義なディスカッションが行われました。

東京地区 東京大会

「教育と幸福、そして生きぬく力」 私たちの明日と、子ども未来へ

第26回東京地区高等学校PTA連合会大会は、7月12日、国立オリンピック記念青少年総合センターにて開催されました。

大会は午後1時に開会、納見敏明都高P連会長の挨拶に続き、佐野元彦全国高P連会長の挨拶の後、東京都教育庁地域教育支援部生涯学習課主任指導主事の鶴飼敦之様にご祝辞をいただきました。

今大会は一昨年から引き続き高校生の活動発表の場も設けて、三部構成としています。各学校の理解とPTAの協力で、5校が舞台発表で出演、7校がギャラリー展示を行いました。

第一部

基調講演は、2009年パラリンピック・バンクーバー大会・アيسスレッジホッケー日本代表の安中幹雄さんに、「教育と幸福、子どもたちの生き抜く力」をテーマに講演いただきました。講演の最後に安中さんから

高校生へ、「なんでもいい、目標をもって継続することが大切です」と、心に響く呼びかけがありました。



第二部

福井大会の第3分科会「生徒指導とPTA」で発表を行う西部南地区から、「心の中の花」と題して発表が行われました。

PTAとして何か生徒たちの力になれないか自問し、通学路に面した校庭に花壇を作り、登下校の時に咲いた花を見ることで沈んだ気持ちを少しでも和ませることができたらと花壇整備を決めたそうです。

第三部

舞台上で勇壮な和太鼓



演奏を皮切りに、元気なストリートパフォーマンズがあり、2チームのコーラスが会場をなごませ、最後に華やかなファッションショーで参加者一同、盛り上がりました。

ギャラリーでは、絵画・写真・中国切絵・漫画・書道・華道作品が展示され、研究展示もあり、子どもたちの日頃の力作を参加者にご覧いただき、参加者・スタッフ共、充実した時間を共有し無事に閉会しました。

北信越地区 長野大会

「教育と考福」〜未来に引き継ぐ 知と恵み〜(全国大会福井大会に順応)

平成26年度北信越地区高P連研究大会長野大会は7月3日(木)・4日(金)の2日間にわたって、長野市ホクト文化ホールを主会場にして開催されました。北信越5県からの1220余名の参加者を



更級農業高校の生徒たちが育てた花と県観光PRキャラクター「アルクマ」が出迎えました。

開会式で山崎康一大会実行委員長は「PTA活動が地域を愛する子どもたちを育てる担い手となるよう、この大会が実のあるものになることを願っている。」と挨拶、また、佐野元彦全国高P連会長は「若者一人ひとりの自己実現をはかれる社会を目指し、家庭・学校・地域の結節点にいる私たちPTAがその役目を果たす活動の連関をつくる風を起こして全国に吹き渡らせてい

ただくことを願いました。」と挨拶されました。次にPTA活動に功労のあった28名に表彰状と記念品が贈られました。続いて来賓を代表して伊藤学司長野県教育長、加藤久雄長野市長から祝辞を頂戴しました。

歓迎アトラクションでは、昨年度全国高等学校ダンスドリル選手権で総合優勝および部門別第1位など毎年輝かしい実績を残している、長野西高校バトン班と長野商業高校チアリーディング部



が、華麗で迫力あるダンスや、若さ溢れるアクロバティックな演技を披露しました。

2会場4ホールで開かれた分科会では、各県からの実践事例の発表が行われ、所定の時間を超過する活発な質疑応答や意見交換が行われました。夕刻からの教育懇談会

では880名を超える参加者が2会場それぞれ真田勝関太鼓の歓迎アトラクションを肴に懇親を深めました。



2日目の記念講演は、スキーノルディック複合のオリンピック金メダリストで現在は北野建設スキー部GMの荻原健司氏の「人を育てる」〜スキー

手たちの主体的な目標の達成のために実践していることや自分がしていることが人に感謝されたり、社会に役立っていると思えることが日々のパワーになる。」など、示唆に富んだお話をいただきました。

引き続き行われた閉会式で、大会宣言を採択し、次期開催県の石川県高P連の館会長からの挨拶、最後に山崎大会実行委員長の開会挨拶で全日程を終了しました。

東海地区 愛知大会

「未来に引き継ぐ知と恵み」



東海地区高等学校PTA連合会愛知大会が平成26年6月20日(金)、名古屋市の名古屋市公会堂大ホールにおいて東海地方の4県から会員1540名が参加し、盛大に開催されました。

開会式では、瀧村めぐみ東海高P連会長及び相川順子全国高P連会長の挨拶の後、竹下裕隆愛知県教育委員会学習教育部長から祝辞をいただきました。

次に、日本オリンピック委員会所属、文部科学省委託JOCナショナルコーチの栄和人氏により「挫折からの復活―3連覇への道」という演題で

講演が行われました。

栄氏は高校時代にレスリングを始め、全日本選手権大会6回優勝、世界選手権大会銅メダル獲得など、ご自身の業績もさることながら、指導者としての力も存分に発揮され、教え子たちは、吉田佐保里選手、伊調姉妹など多くの選手がオリンピックメダリストとして活躍しています。講演は先生のお人柄を表すかのごとく、時に厳しく、時にユーモアを交えたものであり、一流選手の持つ悩みと喜びを垣間見たような気がしました。栄先生、たのしいひと時を本当にありがとうございました。



最後は研究協議で、2校の発表がありました。愛知県立東海商業高校においては、「進路実現に向けてのPTA活動」と題して、PTAが総務、広報、研修、環境の4委員会に分かれ、年間を通じて特色ある活動を展開しています。

また、三重県立松阪高校においては、知徳体の調和のとれた全人的な発達を図っています。そのために、PTAとしても特にキャリア教育に力を入れて学校に協力しています。

いずれの高校も地域との結びつきを大事に考え、生徒たちが高校を出てからの様に生きていくのか、生きる力をどのように育成していくのかを真剣に考えています。

以上、東海地区愛知大会は充実した時間をみなさんと共有して、無事に閉会しました。

近畿地区 奈良大会

「人間力く知行合一く」



第四十回近畿地区高等学校PTA連合会大会奈良大会は、7月6日(日)、近畿各府県市から約2600名の参加を得て、なら1000年会館で開催された。

大会前日には「奈良ロイヤルホテル」を会場に近畿地区高P連総会が開催され、前年度の事業報告および決算報告が承認されるとともに26年度の会長に和歌山県の西原会長が選出された。

総会終了後、翌日の奈良大会の成功を期して懇親会が開催され、各府県市の参加者が「近畿は一つ」の合い言葉を確認し合いながら和気藹々とした雰囲気の中で楽しい一時を過ごした。

大会当日は梅雨空の隙

間から薄日が漏れる程良い天候に恵まれ、会場には早朝から続々と参加者が集まり、賑わいの中の開会となった。歓迎のアトラクションとして、

高校生による秋篠太鼓の演奏や書道パフォーマンスが披露され、「せんと君」を中心に奈良県ゆかりのユルキャラが楽しいトークで会場の雰囲気

を和ませてくれた。開会宣言により開会式が始まった。吉川二郎大会会長、三輪一朝全国高P連副会長が主催者の挨拶を述べ、前田奈良県副知事ならびに中室奈良市教育

長から祝辞を頂きました。続いて表彰式が行われ近畿地区高P連および各府県市の活動に貢献寄与された個人団体へ感謝状が贈呈されるとともに近畿地区高P連主催の広報誌コンクールに入選した団体に表彰状が授与された。

開会式のクライマックスでは大会実行委員会の山本副委員長から大会宣言が発表され満場の拍手

で採択されました。最後に和歌山県の西原会長が次年度開催県としての挨拶を述べ開会式の全てのプログラムが滞りなく終わりました。

休憩を挟み法隆寺管主の山田法胤氏の記念講演が行われた。「家庭教育と仏教の教え」というテーマで人と人の関わり方や物の見方や考え方を様々な事例をあげながら諭すようにお話頂いた内容に会場全体が引き込まれていた。



昼食休憩後3会場4分科会が行われた。どの文科会場においても参加者の意欲と熱気が漲り、それぞれに充実した質疑が飛び交っていた。

各分科会終了後、会場ごとに閉会行事が行われ、奈良大会は様々な成果を残しながら全ての日程を終了した。

中四国地区 高知大会

「緑の山から青い海へ」く夢をつないで未来へく



第56回中国・四国地区高等学校PTA連合会大会高知大会は、7月

11日(金)高知市の高知県民文化ホールにおいて中国・中国四国地区各県より1800名を超える会員の皆さまにご参加をいただき盛大に開催されました。

当時は、台風8号の影響により日程を一部変更して、11時半から開会式を開催しました。

開会式では、中四国高P連会長・生永慎一、全国高P連・佐野元彦会長、高知県教育委員会・田村壮児教育長の挨拶、続いて尾崎正直高知県知事、岡崎誠也高知市長の祝辞が有りました。

開会式後、名古屋商科大学硬式野球部監督・中村順司氏により「野球と私」を演題に講演が行われました。

講演の中では、PL学



園野球部監督時代の経験をともに、子どもたちとどのように接し、どのように指導したのか話していただき、桑田・

清原と同世代の参加者は、当時の状況を思い浮かべながら話を聴き入りました。

昼食後は、予定していた地元高校生のアトラクションが日程変更に伴い中止となりました。日頃の練習の成果を発表できると心待ちにしていた、高知県立椿原高等学校・高知県立日高養護学校・高知県立高知丸の内高等学校の生徒の皆さまには心よりお詫言申し上げます。

研究協議では、岡山県高P連・青山浩司副会長、高知県高P連・西澤和史副会長の両氏を議長に、3つの実践・研究発表が行われました。第1テーマでは、「家庭教育とPTAく歴史と伝統がはぐくむキャリア教育く」と題して島根県立松江北高等学校PTA・石倉弘文会

長、第2テーマでは、「生徒指導とPTAく特色ある学校づくりを通しての生徒指導く」と題して、山口県立防府商工高等学校PTA・財満謙太郎会長、第3テーマでは、「高校再編とPTAく「プロジェクト4」地域振興の要は、健全な高校存続く」と題して高知県立嶺北高等学校PTA・高石清賢副会長よりそれぞれの学校・地域の特性に応じた実践発表があり、その後の質疑応答では活発な意見交換がなされました。

閉会式では、次期開催県の岡山県高P連・小川浩基会長から、岡山県の紹介と大会参加を待ち望む挨拶がありました。

今大会は、台風の影響により日程変更、また高知県への移動に際して参加者の皆さまにご心配、ご迷惑をお掛けしました。当日は中四国高P連会員の皆さまの熱意の下、夏の陽射しの中無事に開催できましたことにあためてお礼申し上げます。

九州地区 鹿児島大会

「深めよう絆 つなごう未来へ」

第58回九州地区高等学校PTA連合会大会は、鹿児島県大会は、「深めよう絆 つなごう未来へ」のテーマで、九州各県から約2800人が参加し、6月20日（金）に鹿児島市で開催されました。

「きばれ」は鹿児島弁で「頑張れ」の意。「ひつとべ」は「ひっ跳べ」で、「あれこれ考えず、とにかく跳んでみる」と行動を促す言葉です。失敗を恐れず、思い切った一歩を踏み出す若者を育てようという思いを込めて大会名としました。



第1分科会は「青少年の健全育成とPTA活動」、第2分科会は「進路指導とPTA活動」の

テーマで、それぞれ実践発表が行われました。質疑も活発に行われ、参加者からは、「発表校の実践内容を早速取り入れることにしました」「分科会を聞いてとてもやる気になりました」などの感想が寄せられました。

第3分科会は「ネットの海に漂う子どもと親の役割」のテーマでパネルディスカッションが行われました。コーディネーターは兵庫県立大学環境人間学部の竹内和雄准教授。パネリストには県警からサイバー犯罪対策室主任、教師代表の生徒指導主任、保護者代表のPTA会長に加え、生徒代表として3月まで在校していた卒業生を迎え、それぞれの立場でスマホ時代のネット社会にどう対応したらよいか意見交換を行いました。

今もつとも関心の高いテーマであり、竹内准教授の絶妙な進め方で、パネリストはもとより会場まで巻き込んで大いに議

論が盛り上がりました。



記念講演は鹿児島県出身で歌手の中島啓江さん。小学校でのいじめられた経験や母親から教わったことなど、ご自分の体験をもとに話され、笑いと涙であつと言う間の90分でした。最後に歌われた「千の風になつて」に、会場のほとんどの人が涙をこらえることができました。

本大会実施のため、昨年8月から実行委員会を中心に準備を進めてきました。当日は、離島も含む県内全地域の学校で係を分担するなど「オール鹿児島」で臨んだ大会でした。アトラクションや生産物販売のため参加した生徒たちも含め、全員の力を結集して無事に終了することができました。

シリーズ 視点

世界に羽ばたけ！

輝く高校生！



世界カデ選手権の様子

スポーツ、芸術、学業さまざまな分野で世界に羽ばたく高校生がいます。輝く高校生。その活躍と保護者の思いを紹介するコーナーです。（調査広報委員会）

第

6回は、昨年の8月にアメリカのフロリダで行われた世界カデ柔道選手権大会60kg級で見事優勝を果たした大島拓海君（18）だ。大島拓海選手について、監督の金本賢治先生は次のように絶賛する。「背負い投げを中心に手技、足技、腰技の豊富な技に加え、自分を極限まで追い込ん

で身に付けた粘り強い精神力や体力等を有するまさに心技体のレベルの高い選手です。常に理論と実践の融合を目指しており、試合での反省を確実にフィードバックして次の実践に生かすことができる努力の天才です。」拓海君は幼少の頃から柔道に励んできたが、常に彼の目標となる人物が

特に柔道を勧めたわけでもないのに、子供たちが活躍していく様子に、ゆかりさんも当初は困惑

身近にいた。それは2つ上の兄、優磨さん（20）である。優磨さんも同時期に柔道を始め、小学校、中学、高校とそれぞれの段階で日本一に輝いてきた。その兄の背中を見つめながら拓海君も小学校、中学校と日本一になった。母、ゆかりさんによると、2つ違いの兄優磨さんとは幼少時から仲が良く、家の和室は常に練習場になっていたという。その過程で、殴り合いのけんかに発展することもたびたびあったらしい。拓海君にとって、兄優磨さんは尊敬する柔道の師匠であり、現在もその思いは変わらない。



▶二〇一二年、一緒にドイツ国際大会に出場、共に切磋琢磨してきた兄 優磨さん（左）と

したという。「私自身は本当は柔道には否定的でした。けれども、一生懸命頑張っている子供の意思を尊重してきました。ここまでやれるとは正直想像もしなかったです」と話す。大島家は、一番上が姉でその下に3人の男兄弟という4人姉弟で拓海君は末っ子である。ゆかりさんは、この男兄弟に対し「苦しい時にこそ笑える、切羽詰まった時にこそ頑張れる人間になれ」と、決して弱音を吐かせなかったという。その親の思い通り、この兄弟は苦しい状況におい

ても何か余裕があるように見える。末っ子の拓海君も今後高校日本一、そしてジュニア日本一を目指していくことになる。いずれ同階級である兄、優磨さんと戦うことになるかも知れない。この先2人が順調に伸びていったとして、オリンピックの出場枠は一つだ。このことについてゆかりさんは、「兄弟2人が一つのイスを奪い合う試合を見る勇氣はないですね。ただ、今は身近な目標に向けて切磋琢磨してほしいです」と、ひそかに期待をよせている。

将来はオリンピック

出場を目指して(一問一答)

―柔道を始めたきっかけは

拓海 自分が5歳の時、一番上の姉が漫画「やわら」の影響を受けて柔道を始めるようになり、それから僕たち弟3人も始めるようになったのがきっかけです。

―続けることができたわけは

拓海 とにかく大きい選手に負けるのが嫌だった

からです。負けず嫌いだっただけですね。

―国際大会も何度か出ているが、外国人はどうですか

拓海 外国人は力が強く、そして手足が長い。けれども外国人とやるのは楽しいです。なぜなら自分の技が結構効くんです。

―阿波高校で伸びたところは

拓海 高校に入学後、何



▲2013. 8. 6 アメリカマイアミ 世界カデ選手権60kg級優勝。左から2番目が本人

度か負ける試合がありました。その経験を経て気持ちや体力を高めることができました。そして、この3年間、自分で自分を律していくことができたと思います。とても充実しています。

―お兄さんは中学校で日本一になって強豪、国士舘高校へ進学されましたが、あなたはなぜ地元の高校に残ったのですか。

拓海 その時は本当に悩みました。兄はこっちへ来いと言うし、県外のいろいろな高校からも誘われました。しかし、阿波高に誘われたことと、阿波高だったから自分の考えで練習を進めることが可能だと思い、地元に残ることを決意しました。結

果的には良かったと思います。自分自身を常にハングリーな状態に置くことができましたから。

―阿波高校は県立高校で進学校でもあり、勉強との両立は大変ではないのですか

拓海 毎日のように補習授業があり休日には模試も受験しなければならず正直きついです。けれど、阿波高は、柔道オンリーという環境でないところに逆に大きな魅力があります。それは、練習時間に制約があるからこそ何でも考えてやるという姿勢が身についたと思うからです。

―主将としてはどうですか

拓海 僕は自分を精一杯追い込んだ練習をするこ

とによって、その自分の態度でみんなを引っ張っていくものだと思います。頑張ってきました。

―あなたはどんな選手ですか

拓海 動きが速く、やりにくいと思われているのではないのでしょうか。

―試合の前にはやっていますか

拓海 必ずイメージトレーニングをやっています。自分に「必ず勝てる」と暗示をかけています。試合の朝は、試合場に向かうところから表彰台に上がるまで、その日の行動をイメージしてから会場に向かいます。そのことによってリラックスできるんです。

―自分の柔道の目標は何ですか

拓海 もっとダイナミックな柔道を身につけたいです。どんなところからでも一本を取れる技を身につけたいです。

―2020東京オリンピックはどうですか

拓海 一段一段階段を登って選手として頂点を目指していきたいです。もちろん目標はオリンピックの金メダリストになることです。兄にも負けたくないです。



▶7月24日 郷土のオリンピック水泳競技メダリストの源純夏さん(右)が激励に

PROFILE

【大島拓海 (おおしま・たくみ)】

徳島県名西郡石井町出身。5歳から姉や兄の影響を受けて柔道を始める。小学5年生の時に全国大会で優勝したのを契機にいっそう熱を入れるようになり、中学3年生で全中優勝。高校は地元の県立阿波高校に進学し、1年、2年と全日本カデ柔道体重別選手権大会(18歳未満のカテゴリー)60kg級で連覇。2年の夏に日本代表で出場した世界カデ柔道選手権大会(8月・アメリカマイアミ)でも優勝を果たした。平成26年3月に開催された全国高等学校柔道選手権大会60kg級では、決勝で判定負けを喫し涙をのんだ。4つ上の兄、凌太さんは、阿波高校柔道部出身で現在は徳島大学で柔道を継続している。また、2つ上の兄、優磨さんは、現在国士舘大学の2年で、シニアの全日本柔道強化選手として、拓海君と同階級でオリンピック出場を目指している。

平成26年度 一般社団法人全国高等学校PTA連合会役員・委員名簿

役職名	氏 名	担 当	選出枠	県名	備 考
会 長	佐 野 元 彦		東 北	秋 田	東北地区会長
副 会 長	三 輪 一 朝	進路対策委員長	理 事 会	兵 庫	
副 会 長	椎 野 正 敬	調査広報委員長	理 事 会	徳 島	
副 会 長	金 井 修	研修委員長	理 事 会	群 馬	
専務理事（業務執行理事）	坂 井 正 人	賠償責任補償制度運営委員長	理 事 会	新 潟	
常務理事（業務執行理事）	池 口 康 夫		全国高等学校長協会		事務局長
理 事	井 上 秀 子	健全育成委員長	理 事 会	神奈川	
理 事	山 本 富 造	進路対策委員	北 海 道	北 海 道	北海道地区会長
理 事	内 舘 茂	研修委員	東 北	岩 手	
理 事	菅 野 宏		関 東	茨 城	関東地区会長
理 事	納 見 敏 明	進路対策委員	東 京	東 京	東京地区会長
理 事	山 崎 康 一		北 信 越	長 野	北信越地区会長
理 事	瀧 村 めぐみ	健全育成委員	東 海	愛 知	東海地区会長
理 事	西 原 英 男		近 畿	和歌山	近畿地区会長
理 事	生 永 慎 一		中国四国	高 知	中国四国地区会長
理 事	栗 林 宏 光		九 州	長 崎	九州地区会長
代表監事	吉 川 二 郎		理 事 会	奈 良	退任理事
監 事	川 原 慎 一		九 州	鹿 児 島	
顧 問	相 川 順 子		東 北	青 森	前会長
相 談 役	高 間 専 逸		北 海 道	北 海 道	元会長
相 談 役	小 栗 洋				全国高等学校長協会 事務局長

総 務 委 員 会

職 名	所属県名	氏 名
委員長・専務理事		坂 井 正 人
会 長	秋 田	佐 野 元 彦
副 会 長		三 輪 一 朗
副 会 長	徳 島	椎 野 正 敬
副 会 長		金 井 修
常務理事		池 口 康 夫
理 事		井 上 秀 子

進路対策委員会

職 名	所属県名	氏 名
委員長・副会長		三 輪 一 朝
副委員長	東 京	納 見 敏 明
委 員	北海道	山 本 富 造
委 員	宮 城	野 田 もと子
委 員	栃 木	鈴 木 重 成
委 員	石 川	館 清
委 員	静 岡	杉 浦 政 紀
委 員	京 都 府	森 崎 綾 子
委 員	鳥 取	水 野 治 郎
委 員	沖 縄	仲 西 春 雅

研 修 委 員 会

職 名	所属県名	氏 名
委員長・副会長		金 井 修
副委員長	岩 手	内 舘 茂
委 員	北海道	洞 野 博 文
委 員	千 葉	大 木 幸 夫
委 員	東 京	池 本 義 信
委 員	福 井	平 澤 良 典
委 員	三 重	上 松 正 吉 郎
委 員	奈 良	杉 本 喜 久 子
委 員	岡 山	小 川 浩 基
委 員	宮 崎	貴 嶋 憲 太 郎

健全育成委員会

職 名	所属県名	氏 名
委員長・理事		井 上 秀 子
副委員長	東 京	三 木 健 司
委 員	北海道	村 上 義 人
委 員	福 島	湯 浅 大 郎
委 員	神奈川	松 本 一 彦
委 員	新 潟	野 澤 裕 朗
委 員	愛 知	瀧 村 めぐみ
委 員	滋 賀	野 瀬 隆 之
委 員	広 島	中 津 久美子
委 員	佐 賀	小 出 邦 彦

調査広報委員会

職 名	所属県名	氏 名
委員長・副会長	徳 島	椎 野 正 敬
副委員長	東 京	柳 原 正 人
委 員	北海道	新井田 寛
委 員	山 形	尾 関 文 行
委 員	埼 玉	大 山 重 憲
委 員	富 山	牧 田 和 樹
委 員	岐 阜	石 原 幸 喜
委 員	兵 庫	山 口 隆 英
委 員	福 岡	永 尾 秀 樹

賠償責任補償制度運営委員会

職 名	所属県名	氏 名
委員長・専務理事		坂 井 正 人
副委員長	東 京	青 木 真佐枝
委 員	北海道	宮 川 恒 美
委 員	青 森	本 谷 隆 司
委 員	埼 玉	島 崎 富 夫
委 員	石 川	竹 川 正 則
委 員	三 重	荒 井 順 治
委 員	京都市府	澁 谷 滋
委 員	広 島	土 谷 流 廣
委 員	熊 本	田 中 和 幸